

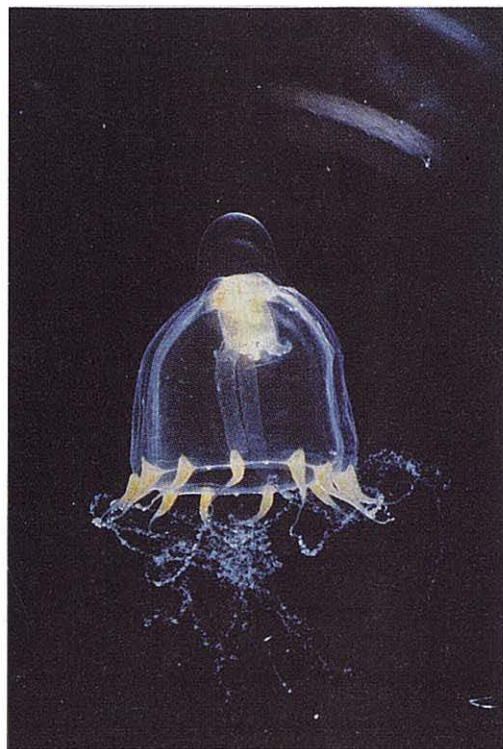
2013年(平成25年)7月3日 水曜日 (10)

# エボシクラゲ



久保田 信

100



エボシクラゲは名前の通り、烏帽子型をしたクラゲである。そのゼラチン質の円すい状突起の機能はまだよく分かっていない。

クラゲの進行方向の先に装備されているので、ひよっとしたら新幹線の先端部のように、摩擦抵抗を少なくするのに何らかの貢献をしているのかもしれない。

エボシクラゲはヒドロクラゲの仲間では比較的大型種で、傘高は10ミリ余りに達する。傘縁触手は最多で32本ある。おのおの触手瘤(りゅう)の外側に1個の眼点を備えるので、光の明暗を感じることができ、画像はよく成長した個体で、ポリプを飼育し、それから遊離した小さな未成熟クラゲを実験室で飼育したものである。まだ完全には成熟していない。このようにクラゲの飼育は研究する上で大切に種類を決めるのに最も有効である。

エボシクラゲには放射管が大方のクラゲと同じ4本ある。これは消化循環系の一部となつて消化された餌を全体に輸送する装置である。本種で特徴的なのが、しわになった生殖巣である。生殖巣は体中央にぶら下がる口柄の周りに形成される。しわになつて面積を増やし、少しでも多くの配偶子をつくらうとする仕掛けなのかもしれない。

△ ポリプを実験室で飼育し、遊離させた未成熟なエボシクラゲ

(京都大学准教授)